

## 保育者養成課程学生の共同保育実践における学びの変化

生駒 英法 村田 健治 村上 優

*IKOMA Hidenori MURATA Kenji MURAKAMI Yu*

本研究は、保育者養成課程に在籍する学生による共同的な保育実践を一事例として取り上げ、実践を通じた学生の学びの様相について検討したものである。N短期大学の造形表現・保育内容・音楽表現フィールドに所属する学生が、認定こども園での表現発表および地域イベントに取り組んだ実践を対象とし、学生へのアンケート調査（自己評価）と、保護者および会場職員を含む関係者へのアンケート調査（学生に対する評価）を実施した。その結果、学生の自己評価からは、子どもの姿に応じた臨機応変な対応、協働的な運営、教材研究などに関する学びが深まっていることがうかがえた。また、関係者からの評価においては、子どもとの関わり方や表現活動に対する姿勢が肯定的に捉えられていた。これらの結果から、本事例における地域連携型の学修は、学生の学びの深化に寄与するとともに、地域との相互的な関係構築にも一定の意義を有する可能性が示唆された。

キーワード：領域「表現」、保育実践力、主体的な学び、地域連携

### 1. はじめに

保育者養成において、実践的な学修の重要性は広く指摘されている（田村・木村・谷村，2021；大屋，2025；津村・山岡，2023）。特に、子どもや保護者、地域住民との直接的な関わりを通して得られる経験は、教室内の学習だけでは得られない学びを学生にもたらす。N短期大学では、2年間のゼミナール活動において、学内での活動に加えて、認定こども園や地域施設との協働による表現発表やイベント参加を継続的に行ってきた。このような実践は、学生にとって「保育者としての視点」を獲得し、子どもの姿を基盤とした判断力や協働力を育てる貴重な学修機会となっている。

本稿では、2025年3月の地域公民館主催イベントにおける屋台ごっこ・音楽表現遊びの実践を一事例として取り上げ、学生の学びや実践の変容について検討することである。そのために、2025年3月に実施された当該実践について、学生アンケートおよび関係者アンケートをもとに教育的効果を分析するとともに、2024年8月の認定

こども園での劇遊びを中心とした表現発表との比較を行う。これらの分析を通して、地域と連携した活動が学生の学びにどのように寄与するのかを明らかにし、今後の保育者養成の実践型学修における教育や指導に対する知見を得ることを目的とする。なお、本稿で扱う実践は、地域機関との継続的な連携や行事運営を伴うものであり、一般的な講義形式の授業では実施が困難な内容である。そのため、本研究では、少人数での協働的な活動や主体的な企画・運営が可能であったゼミナール形式の学修を対象として取り上げている。

### 2. 方法

本研究の対象は、N短期大学において造形表現、保育内容、音楽表現の各フィールドに所属する特定のゼミナール学生に限定されている。対象学生数は少数であり、本研究は統計的な一般化を目的とするものではなく、特定の教育実践における学生の学びの様相を事例的に検討することを主眼としている。

**A. ゼミナールの実践内容**

N短期大学には入学から卒業までの2年間を通してゼミナールⅠ・ゼミナールⅡの授業を履修することができる。学生は、得意分野や興味のある専門性を伸ばすことを目的として、幼児体育、造形表現、保育内容、音楽表現、自然と遊び、身体表現、子育て支援の7つの分野から選択する。本研究における実践に参加した学生は、造形表現フィールド・保育内容フィールド・音楽表現フィールドに所属している。

**(1) 造形表現フィールドの実践内容**

造形表現ゼミナールでは、大型シャボン玉、立体迷路制作、紙粘土、壁面装飾といった保育現場で実践できる造形あそびや制作について2年間学んできた。表1は2024年度の学修成果及び到達目標である。今回のイベント参加は、ゼミナール授業の一環として、地域住民と交流を深めるとともに、学生自身が主体的に造形活動を通して子どもと関わり経験を積むことを目的とした。また、創造的な活動を通じて子どもたちに楽しさを提供するとともに子どもの発達に応じた造形物を制作し、地域貢献につなげることを目指した。

表1 ゼミナールⅡ（造形表現）の学修成果及び到達目標

<p>①子どもの発達に応じた造形を取り入れた遊びができる。</p> <p>②子どもたちの興味を引く仕掛けや工夫について説明することができる。</p> <p>③作品の内容・構成を理解して表現活動に活かすことができる。</p>
---

**(2) 保育内容フィールドの実践内容**

2023年度（1回生）は、保育現場の技術の基礎を学修するため、季節の壁面制作や、保育室の誕生表作成などの演習を通じて、個人の保育技術を培う実践を重ねた。

表2 ゼミナールⅡ（保育内容）の学修成果及び到達目標

<p>①五領域が総合的に関連し、子どもが成長・発達していくことを遊びの理解を通して認識することができる。</p> <p>②遊びを指導する保育者の役割について、保育実践事例を通して理解・考察を深め、保育者としての実践力を獲得することができる。</p> <p>③発表作品の内容・構成を理解して表現活動に活かすことができる。</p>
---

2024年度（2回生）は、学修成果及び到達目標として表2に示した3点を定め、実践的な学修を進めてきた。具体的には、保育室の日めくりカレンダーの製作や乳児向け玩具の製作などを行い、保育環境構成のあり方や教材について学生自身が主体的に検討・実践する機会を設けた。これらの活動は、保育実習での体験を踏まえ、学生と教員が共同で企画・検討しながら進めることで、保育内容理解の深化を図った。

**(3) 音楽表現フィールドの実践内容**

2023年度（1回生）は、楽器演奏技術の習得とゼミナール内の親睦形成を目的に、アンサンブル演奏を中心とした演奏を行った。また、地域の親子が参加する行事において演奏プログラムの企画・準備を行った。

2024年度（2回生）は、表3に示した学修成果及び到達目標を設定し、前年度の内容を基盤としつつ、技術的・音楽的により高度な学びへと発展させた。さらに、教員主導で行っていた行事準備についても、学生の主体性を育てる目的で、学生自らが運営を担う形へと移行した。

表3 ゼミナールⅡ（音楽表現）の学修成果及び到達目標

<p>①保育者・教育者として必要なピアノや他の楽器の演奏技術を身に付け、積極的に演奏することができる。</p> <p>②自分自身が自由な発想で音や音楽を楽しみ、保育・教育に生かすことができる。</p> <p>③保育・教育における音楽表現活動やアンサンブル演奏について、様々なアイデアを出すことができる。</p>
---

**B. 表現発表までの学び**

本実践に参加した2回生は、N短期大学のカリキュラムにおける「幼稚園教育実習Ⅰ・Ⅱ」及び「保育実習Ⅰ」の実習を修了している。

これらの実習では、学生が個々に指導案を作成し、実習園・所にて部分保育や設定保育等の実践経験を重ねる中で、子ども理解や教材研究について理解を深めている。

**C. 共同保育実践の概要**

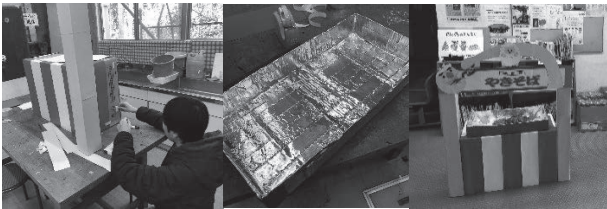
ゼミナール活動の一環として、地域の幼稚園、認定こども園、保育園、および地域子育て支援拠点と連携し、地域の子どもや保護者、地域住民との実践型プロジェクト



への搬出入を想定し、運搬や組み立て・解体が容易な可搬性を備えた構造とした。材料には廃材段ボールを用い、入手性、加工の容易性、軽量性と強度を兼ね備えた教材としての特性を活かした。

土台の高さは約65cmとし、鉄板部分には麺素材を操作できる平面を確保した。また、麺の落下を防ぐため周囲に囲いを設け、安全性と操作性を高めた。各部材はボンドと両面テープで固定し、装飾には紅白模様を用いて祭りの雰囲気表現した。看板用の柱を設置することで構造的安定性も確保した。

看板は当初、既製のロゴ素材を使用した。創造的表現を重視する観点から、焼きそば屋の店主を想起させるキャラクターを画用紙で制作し、看板上部に配置した。これにより、視覚的誘因を高め、造形物としての魅力と遊びへの導入性を強化した。



## ②焼きそばの制作について

焼きそばは、子どもへの持ち帰り用教材として100個を制作した。麺素材には当初複数の茶色系毛糸を試作したが、視覚的再現性を比較検討した結果、ハマナカボニー482番を最適と判断し採用した。

さらに、焼きそばとしての認識を高めるため、紅ショウガ、青のり、キャベツを画用紙で再現し、教材としての再現度と視覚的魅力的向上を図った。毛糸を透明フードパックに詰める際には隙間が生じないように配慮し、実物に近い質感を意識した。本活動では、素材選択や構成の工夫を通して、子どもにとって魅力的な造形表現となることを目指した。



## (5) 保育内容の発表内容

屋台ごっこを出店するにあたり、学生と企画内容の検討を行った。本イベントに参加する地域の子どもの年齢層は乳幼児から中学生までと幅広いため、「遊び体験」ができる屋台と、縁日の屋台を模したごっこ遊びとしての屋台を展開することとした。本イベント「絵本広場in南部～季節外れの夏祭り～」の世界観に没入できるように、遊び体験を重視した屋台と「ごっこの世界観」を味わう屋台に分け、参加者が繰り返し楽しめる構成とした。

### ①遊び体験ができる屋台「わなげ屋」「魚釣り」

「わなげ屋」では、実際の保育現場で用いられる素材を参考に、新聞紙とビニールテープで投げ輪を作成し、段ボールや食品ラップの芯材などの廃材を用いてわなげ台を制作した。また、わなげ台には学生の顔をイラスト化したものを貼り付け、遊びを通して子どもたちが学生に親しみをもてるよう工夫した。



「魚釣り」では、子どもたちの発達段階に応じて難易度を調整できるように、磁石を用いた釣り方と、リングをフックに引っ掛ける釣り方の二種類を用意した。釣り竿は木材にビニールテープを巻いて安全性に配慮し、魚パネルは紙皿やフェルトを用いて平面的・立体的な表現のものを制作した。

発表当日は、学生が当番制で店番を行い、呼び込みや遊びの援助を通して子どもたちと関わった。学生が屋台のスタッフになりきり、子どもたちと一緒に遊びながら関係を深めている様子が見られた。



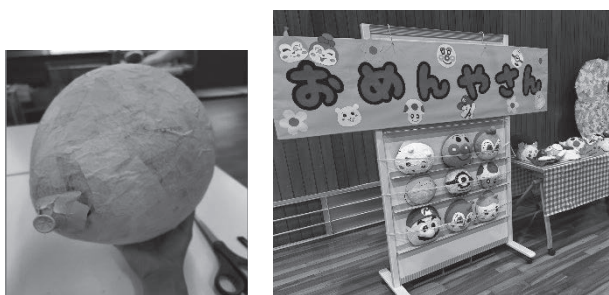
### ②ごっこの世界観を楽しむ屋台「わたあめ屋」「お面屋」

「わたあめ屋」では、手芸用の綿に水性アクリルマーカーで色付けし、割り箸を取り付けた疑似わたあめを制作

した。この活動は、保育現場での実践を想定し、子どもが自分で作ることができる教材として検討したものである。また、わたあめ機を模したデモ機を制作し、屋台に設置することで、視覚的にも楽しめる環境を構成した。



「お面屋」では、フォトブースとしての活用を目的に、張り子の技法を用いた面の制作を行った。制作には風船を型として使い、紙を重ねて貼り付ける方法を採用した。この方法は、紙の貼り付けが容易で、型の取り外しも簡単であることから、保育現場でも多く用いられている技法である。



#### (6) 音楽表現ゼミナールによるリトミック、音楽絵本と合唱

会場の舞台では、中学生有志による食育活動報告、地元ダンスチームによる発表などが行われ、そのプログラムの一つとして、N短期大学によるリトミック、音楽絵本および合唱の発表を行った。

##### ①リトミック

大型絵本『どうぶついろいろかくれんぼ』を用い、動物のヒントとなる絵やセリフを読みながら、動物を想起しやすい音楽をピアノで演奏した。子どもたちは、音や絵を手がかりに動物を想像して発言し、そのやりとりの中から正解が示された後、自由にその動きを表現した。表現した動物はクジラ、鳥、ゴリラ、カメ、ネコの5種類である。演奏曲は、鳥には『小鳥のうた』、ネコには『ねこふんじゃった』を用い、クジラ、ゴリラ、カメについては筆者作曲の楽曲を演奏した。これらの楽譜を図2に示す。

##### ②音楽絵本

次に、大型絵本『はらぺこあおむし』および楽譜『いっしょにうたおう！エリック・カール絵本うたのソングブック』を用いて音楽劇の発表を行った。楽譜に記載された曲を演奏しながら該当場面の絵を提示し、物語の進行



図2 リトミックで使用した楽譜(くじら, ゴリラ, カメ) (著者作成)

に合わせて段ボールと画用紙で制作したあおむしを登場させた。使用楽器はピアノ、グロッケン、打楽器(ボンゴ、ウィンドチャイム、パフパフラッパ、トライアングル)である。

##### ③合唱

最後に、「にじ」および「Believe」を合唱で演奏した。両曲は小学校教科書に掲載されており、保護者世代にも広く知られていることから選曲した。「にじ」は音楽表現フィールドの学生5名による斉唱とし、「Believe」はソプラノ2名、アルト2名、男声1名による三部合唱で演奏した。

### 3. 学生向けアンケート

本研究では、学生自身の評価と当日参加した保護者・会場職員からの評価を対比させるために、学生と保護者・会場職員それぞれにアンケート調査を行った。この項目では学生自身の自己評価のアンケート内容と結果を示す。なお、学生アンケートおよび次項で扱う関係者アンケート

トの集計結果は、判読性を考慮し、図表として巻末にまとめて掲載する。

#### (1) 学生向けアンケートの調査対象及び調査期間

本研究では、造形表現ゼミナールの学生1名と保育内容ゼミナールの学生8名、音楽表現ゼミナールの学生5名の計14名に対してアンケート用紙による筆記での調査及び回収を行った。調査期間は、発表当日となる2025年3月16日の発表後に行った。調査に際しては、アンケートへの回答が任意であること、回答を拒否できること、および回答後に撤回することが可能であることをアンケート用紙に記載した。さらに、回答内容によって不利益を被ることはないこと、個人情報収集しないこと、研究成果を本稿で発表することについても明記した。これらの事項を口頭でも説明し、同意を得た上で実施した。対象者14名のうち、14名が回答し(回収率100%)、有効回答率は100%(14名)であった。

#### (2) アンケート結果

質問項目としては、公演の事前準備や練習における取り組みの意識について(Q1~Q2)、公演当日を振り返り自己評価としてどのように取り組むことができたか(Q3~Q5)、今までの活動と今回の活動での学びの比較(Q6)、公演を通して感じた充実度(Q7)、今後の活動や取り組んでみたい内容(Q8~10)を尋ねた。

①「Q1. 今回の発表の事前準備・練習について、特に積極的に取り組んだことは何ですか。特にあてはまるものにチェックをいれてください。(複数回答可)」について

前回と今回の回答結果を比較すると、今回、最も回答が多かった項目は「自分の役割に責任を持ってやり遂げる」ことであり、12名(85.7%)が選択していた。授業期間が終わってから本格的な準備をしたことも影響していると考えられるが、自分がすべきことに、より責任を感じながら取り組んでいたと考えられる。続いて多かった項目は、「発表当日に向けた体調管理を行うこと」で、8名(57.1%)が選択した。時期的なことも考えられるが、学生一人一人が責任感を強く持っていたと考えられる。

前回のアンケート調査時に、9名と最も多くの学生が回答した「③発表する学生同士のコミュニケーション、情報共有や共通理解をすること」については、今回のアンケート調査では5名(35.7%)のみが回答し、前回と比

較すると、選択した学生数は減少している。これは、前回の取り組みを通して協働体制がすでに十分に形成されており、今回はそれを前提にしたうえで個々の役割遂行に重点が移行したと考えられる。また、「⑦今日当日に向けた体調管理を行うこと」や「⑧自分の役割に責任を持ってやり遂げる」ことを選択した学生が前回よりも増えており、当日に向けた見通しを持って取り組む姿勢が強まり、一人一人が自分の役割を主体的に果たす意識が高まったことを示していると捉えられる。

②「Q2:Q1についてそのように取り組んだ理由は何ですか。具体的に記述してください。」(自由記述)について

今回の自由記述の回答からは、学生一人一人が自らの役割を自覚し、「期日までに完成させる」「個人パート練習を毎日行う」など、それぞれの立場で責任をもって準備に取り組んでいたことが読み取れる。また、「子供たちが楽しめるように声掛けとかも考え」たり、「子どもたちが楽しい気持ちで過ごせるように、教材の選定はメンバー全員力を入れて取り組んだり、「当日どのようにしたら楽しんでもらえるのかを考えた」といった記述から、子どもに楽しんでもらえる活動を提供するという目標を持って積極的に取り組んでいたと言える。

前回の回答では、同士でコミュニケーションを取り、仲間とともに共同して取り組むことで発表を成功させるという一つの目標に向かっていったことがうかがえるが、今回はコミュニケーションが取れていることを前提としていかに子供たちが楽しめるかに重点を置いて考えられたのではないかと推測できる。

③「Q3. 表現発表当日について、積極的に取り組んだこと・できたことは何ですか。特に当てはまるものについてチェックを入れてください。」(複数回答可)について

前回と今回の回答結果を比較すると、今回の結果では「②学生同士でコミュニケーションを取り合いながら実践すること」および「⑨自分の役割や担当に責任を持って取り組むこと」が最も多く、9名(69.2%)の学生が選択した。次に多くの学生が選択したのは「③会場の環境構成や後片付けを行うこと」、「⑧臨機応変な対応・実践をすること」の項目で、8名(61.5%)が選択した。これらのことから、当日の運営を支える協働意識を強く持ち、また、子どもの姿に応じた柔軟な対応や、当日の状況に合わせた実践的な取り組みを重視していたことが

読み取れる。

前回の結果では、「①教材内容(劇の内容・手遊び・歌・体操)の選定について意欲的に実践すること」と「②学生同士でコミュニケーションを取り合いながら実践すること」が最も多く選択されていたが、今回もこれらの項目が引き続き多くの学生に選択されており、継続して重視されていることが確認できる。一方で、今回の回答では環境構成や臨機応変な対応、子どもの姿に応じた声かけなど、より実践的で応用的な項目の選択が前回より増加していた点特徴的である。これは、学生がこれまでの活動経験を踏まえて、単に役割をこなすだけでなく、その場の状況に応じた判断や対応の重要性をより意識するようになったことを示している。これらの点から、今回の発表では、前回よりも学生の視野が広がり、「協働」「責任」「実践的判断」という複合的な視点から活動に取り組んでいたと言える。

④「Q4. Q3の質問で選択した項目について、積極的に取り組んだ理由について、具体的に記入してください。」について

自由記述の回答からは、学生がこれまでの経験を通して培ってきた、子どもと積極的に関わろうとする姿勢が、発表当日に強く表れていたことが読み取れる。学生は、子どもが楽しく活動できるように声をかけたり、状況に応じて言葉がけを変えたりするなど、子どもの姿に合わせた柔軟な対応を意識して取り組んだと言える。さらに、ブース運営や環境構成においては、学生同士が積極的にコミュニケーションを取り、場の状況を共有しながら臨機応変に対応していたことがわかる。こうした記述から、学生は協働的な関わりを通して全体の進行を支えようとする意識を持ち、子どもにとって安心できる環境をつくることに責任感をもって取り組んでいたことがうかがえる。

前回の結果では、教材内容について十分な理解を踏まえた上で実践していること、また、保育者としての思考を持って取り組んでいることが読み取れたが、今回の回答では、それに加えて「子どもとの関わりそのもの」への意識が強まっている点特徴的である。子どもの姿を起点とした応答的な関わりが多く見られ、前回よりも実践的な保育者視点が育っていることが読み取れる。加えて、今回の回答には、学生同士のコミュニケーションに関する言及も増加し、「効率よく行動する」「場の空気に早く気づく」「他の子にしっかり伝わるように伝達した」など、前回より実用的で組織的な視点が芽生えており、

子ども、仲間、会場全体を視野に入れた、より総合的な実践力が育っていることが明らかである。

⑤「Q5. 表現発表を終えて、準備から当日の実践までを自分なりに振り返り、難しかったことやできなかったことは何ですか。具体的に記入してください。」について  
今回の自由記述からは、学生が表現発表に向けた準備や当日の実践において、様々な困難に直面していたことが読み取れる。特に、春休み期間中であったために全体練習の時間が限られ、制作や環境設定に十分参加できなかったこと、また各自の予定の都合により練習や準備が不十分になったことが多くの学生から指摘されていた。前回の結果では、大勢の子供たちの前で保育を進めていくことへの難しさや表現発表に向けたモチベーションの維持に課題を感じている様子うかがえたが、今回の結果では、これらの課題に加えて、春休み期間中の制約や全体練習の不足、制作物や環境設定への十分な関与ができなかったことなど、より外部条件による制約が強く意識されている点特徴的である。これらのことから、経験を重ねることにより、単なる個人技術や役割遂行だけでなく、全体の計画、協働、子ども対応を統合的に考えながら準備と実践を行う重要性を体験的に学んでいることが読み取れる。

⑥「Q6. 1回生から学内行事(こどもフェスタ)や表現発表(8月・いちぶちどり保育園)と活動を続けてきましたが、これまでの活動を今回の活動での学びにはどのような点で違いがありましたか。具体的に記述してください。」について

今回の活動に関する自由記述からは、学生がこれまでの学内行事や表現発表での経験を踏まえ、活動の質的变化や学びの深化を実感していることが読み取れる。学生は過去の経験を「引き出し」として活用しながら、今回の活動でしか得られない新たな学びや成長を実感しており、経験の蓄積による臨機応変さ、個別対応力、協働力の向上が明確に示されていると考えられる。

⑦「Q7. 今回の表現発表は充実して取り組むことができましたか。」について

今回「かなり充実して取り組めた」と回答した学生は9名(69.2%)、「少し充実して取り組めた」と回答した学生は4名(30.8%)であり、学生自身の充実感があったことがわかるが、前回と比較すると、高い充実感を感じた学生の割合は少し減少した。

⑧「Q8. 今回のような発表を継続して次回以降も取り組みたいと思いますか。」について

今回「かなりそう思う」「少しそう思う」と回答した学生はそれぞれ7名(53.8%)、6名(46.2%)であり、学生は今後も継続して取り組みたいと意欲的に考えている様子が見えられた。前回と今回とで大きな変化はなく、学生は前回や今回のような表現活動を肯定的に捉えていると考えることができる。

⑨「Q9. ゼミナールⅡでの学内行事や外部公演などを通じた経験から、卒業後に活かしたいと考えることはありますか。自由に記入してください。」について

回答結果から、学生たちはゼミナールⅡの学内行事や外部公演を通して、保育者として必要となる多様な力を獲得したという実感を持っていることがわかる。特に多く見られたのは、子どもの姿に応じた「臨機応変な対応」を卒業後に活かしたいとする記述であり、実践的な視点から子どもの行動を理解しようとする姿勢が形成されていることが示された。また、「チーム一丸となってコミュニケーションを取りながら取り組む活動はとても達成感があったこと、「仲間と一緒に作り上げる」こと、「他人のことまで考えて行動すること」など、協働的な関わりに関する記述が多く見られた。これらの記述から、学生は本実践を通して、コミュニケーションの重要性を強く認識するようになったと考えられる。学生はゼミナール活動を通して得た知識、技術、協働の姿勢を総合的に捉え、それらを卒業後の保育現場で積極的に活かしている前向きな姿勢が見えられた。

⑩「Q10. 保育現場や外部施設とのコラボレーション活動として取り組んでみたい内容があれば自由に記入してください。」について

回答結果からは、子どもたちの興味や反応の高さが実感できた活動を今後も取り組みたいと考えている学生も存在したことがわかる。また、「ゼミで年1で集まってイベントがしたい」という記述からは、活動そのものへの愛着や継続的な学びへの関心が継続していることが読み取れる。

#### 4. 関係者向けアンケート

次に、関係者アンケート形式で学生の評価などを行って集計したものについて述べる。本実践での関係者は、イベント主催者やボランティア団体の参加者らを対象と

し、前回の実践発表におけるアンケートでは現場の保育者を対象とした。評価結果を比較することで、学生の実践や学びに何らかの変化や違いが見られたのかを検証する。

##### (1) 関係者向けアンケートの調査対象及び調査期間

絵本広場in南部～季節外れの夏祭り～のイベント出展者を対象にGoogleフォームによるアンケートでの調査及び回収を行った。調査期間は、発表当日の2025年3月16日の発表後に行った。調査に際してアンケートへの回答は任意であり、回答を拒否することや回答後に撤回することも可能であることを説明するとともに、回答内容によって回答者が不利益を被ることはないこと、個人情報収集しないこと、また、研究成果を本稿で発表することをフォーム内に記載した上、口頭で説明、同意を得て実施した。対象者25名のうち、25名が回答し(回収率100%)有効回答率は100%(25名)であった。

##### (2) アンケート結果

①「Q1. 絵本広場in南部～季節外れの夏祭り～に充実して取り組むことができましたか。」について

Q1の参加関係者の取り組み意識について回答を得たところ、9割以上が「かなり充実して取り組むことができた」としており、イベント全体への充実度が高かったことがうかがえる。

②「Q2. 実際にご覧になった学生の催しにチェックをつけてください。(複数回答可)」について

学生の催しについては、表現発表及びごっこ遊びの双方に8割以上が実際に体験していたことがわかった。

③「Q3. 発表当日の学生の様子をご覧になって、積極的にできたこと・取り組んだと考えられることは何ですか。特に当てはまるものについてチェックを入れてください。(複数回答可)」について

今回の発表において「発表教材の意欲的な実践」とする回答が最も多く、23名(92%)から選択された。この項目は前回の発表においても回答数が最も多く、前回・今回ともに同様の傾向が見られたことから、学生が主体的に教材研究を進め、選定した教材内容を意欲的に実践していた様子が関係者に評価されていたと考えられる。

「学生同士でのコミュニケーションを取り合いながら実践すること」「会場の環境構成や後片付け」「ボランティア活動に対するモチベーションを保つこと」について

は、いずれも16名(64%)と、回答者の過半数を超える結果であった。特に「会場の環境構成や後片付け」については、前回と比較すると今回の結果では約20%の回答数の増加が見られた。これは、今回の発表において、学生が会場の設営から撤収に至るまでの作業に参加し、主体的に行動していたことが評価された結果であると考えられる。

一方で、「発表当日、自分なりに達成したい目標をもって取り組む」については、前回に比べて約30%の回答数の減少が見られた。また、「教員の指示や指導を踏まえて行動すること」についても同様に、約30%の回答者数の減少が確認された。今回の発表では、「屋台ごっこ遊び」を中心とした活動において、学生自身が主体となって地域の子どもや出展者と関わりながら実践を進めていたことから、関係者にとっては、目標達成に向けて取り組む姿や教員の指示を受けて行動する姿として捉えにくかった可能性が考えられる。

④「Q4. 発表当日の学生の様子をご覧になって、良かったと思われる点をご自由にご記入ください。」について

Q4では、発表当日の学生の様子について自由記述を求めた。得られた回答は内容に基づき、①子どもへの接し方・関わり方、②パフォーマンス(歌・表現・読み聞かせ等)、③全体の雰囲気や学生の態度、④運営・対応面の四つの視点に分類された。

これらのうち、特に「子どもへの接し方・関わり方」に関する記述では、好意的な評価が多く見られた。学生が子どもに対して笑顔で積極的に関わろうとする姿勢や、子どもの反応に応じて関わり方を工夫していた様子が評価されており、前回の実践に引き続き、地域の子どもたちとの関わりの中で、保育者として求められる「相手の立場に寄り添った関わり」を実践しようとする姿勢が継続して育まれていることがうかがえる。

また、「パフォーマンス」や「全体の雰囲気や学生の態度」に関する記述からは、学生自身が活動を楽しみながら取り組んでいた点や、子どもだけでなく大人も一体となって楽しめる内容であった点が評価されていた。これらの評価は、学生の表現活動が場の雰囲気づくりに寄与し、参加者全体を巻き込む実践となっていたことを示すものと考えられる。

さらに、「運営・対応面」に関する記述では、対象となる子どもや保護者が楽しんで参加できるような内容を取り入れた点が評価されていた。

⑤「Q5. 今回の学生の活動について改善すると良いと思われた点をご記入ください。」について

改善点に関する自由記述では、学生の発表を概ね好意的に受け止める評価の中に、今後の課題を示す記述がみられた。具体的には、学生のパフォーマンスにおいて、体を大きく動かすことや、参加者に声を届けようとする姿勢、笑顔について、さらなる工夫が必要であるとの指摘があった。また、活動内容についても、「童謡を取り入れる」など、保護者も一体となって参加できる構成を検討する必要性が示唆された。

声の大きさや、体を使った表現の大きさについては、前回・今回のいずれの結果においても改善を求める記述がみられ、継続的な課題として位置づけられる。

⑥「Q6. 今回の発表のように、保育者を目指す学生たちが地域の活動に参加することで、地域の子どもたちにとってどのようなメリットがあると考えられますか。(複数回答可)」について

「歌やリズムに親しみ、様々な音楽表現の楽しさを体感することができる」については、21名(87.5%)と最も多くの回答がみられた。次いで、「異年齢での関わりを深める機会をもつことができる」が19名(79.2%)、「身近な大人(学生や地域ボランティア)と親しみをもって関わりすることができる」が17名(70.8%)と続き、本実践が音楽表現の体験にとどまらず、人との関わりを広げる機会としても捉えられていたことがうかがえる。

前回と今回の回答結果を比較すると、とりわけ「異年齢での関わりを深める機会をもつことができる」と捉える回答が増加傾向にあった。一方で、その他の項目については大きな増減はみられず、前回と同様の傾向が維持されていた。

⑦「Q7. 今回の表現発表・ごっこ遊びを通して、主催者・共催者にどのようなメリットがあったと考えられますか。」について

本設問の回答からは、「地域の様々な人達のコミュニケーションを深めるきっかけとなった」、「地域の方や、初対面の方など、交流が深められた」といった記述がみられ、地域の人々との交流や関係性の構築に寄与していた点が評価されていた。

前回と今回の回答を比較すると、いずれにおいても、音楽や表現活動が参加者にとって良い影響を与えるものであるという評価が共通して示されていた。また、学生が子どもと関わる機会をもつこと自体に教育的意義があ

ると捉えられている点も、両実践に共通していた。一方で、回答者の立場の違いにより着目点には相違がみられた。今回は保育者による回答であったため、子どもの姿や育ちへの良い影響といった「子ども目線」でのメリットに言及した記述が多くみられたのに対し、今回はイベント主催者や地域ボランティア団体の参加者が回答者であったことから、地域交流の深まりや学生の学びに対する評価といった「地域・学生の視点」に基づく記述が多く示されていた。

## 5. 考察

今回の共同保育実践と前回実践との比較から、学生の学びには、「協働の質」と「実践的判断力」の両面において変化がみられた。今回は、教材内容の理解や役割遂行の意識が中心であったのに対し、今回の実践では、子どもの姿に応じた臨機応変な対応や、場面に応じた声かけなど、実践場面に即した判断や関わりに関する項目が多く選択されていた。このことから、実践経験の蓄積を通して、学生の視点が「自分の役割中心」から「子どもを起点とした保育的判断」へと移行してきたことが示唆される。

また、学生同士のコミュニケーションについては、前回実践において協働の基盤が形成されていたことを前提としつつ、今回はその協働がより発展的に発揮されていた点が特徴である。環境構成やブース運営など、複数の判断や調整が求められる場面において、学生同士が状況を共有しながら柔軟に連携して対応していた様子が、学生アンケートの結果から読み取れた。これらの結果から、協働的な関わりは単なる役割分担にとどまらず、実践を支えるための実用的な力として機能していたと捉えられる。

一方、関係者アンケートの結果からは、学生の子どもの関わり方やパフォーマンスに対して高い評価が寄せられていた。特に、歌やリズムなどの音楽表現を媒介として、子どもだけでなく保護者や地域住民を巻き込みながら温かい雰囲気をつくり出していた点は、地域連携活動ならではの教育的意義を示すものといえる。これらの評価は、学生自身の振り返りにおいて示された学びの内容とも対応しており、学生の実践が他者からも一定の成果として認識されていたことがうかがえる。

その一方で、改善点としては、表現の大きさや参加者への働きかけ方など、身体表現に関する課題が指摘されていた。これらは、学生自身の振り返りにおいて示され

た「練習時間の確保の難しさ」や「準備への十分な関与ができなかった」といった課題とも関連しており、今後の実践においては、事前練習やリハーサルの充実を通して、表現者としての基礎的な力を高めていく必要があると考えられる。

以上のことから、ゼミナールⅡにおける地域連携型の表現活動は、学生に対して単なる技術習得にとどまらない多面的な学びをもたらしているといえる。子ども理解、教材研究、協働力、実践的判断力といった保育者として不可欠な資質が、実践の積み重ねを通して段階的に育まれていることが、本研究の結果から示された。

ただし、本研究は対象学生数が少数であり、特定のゼミナールに所属する学生を対象とした事例研究であるため、得られた結果を一般化するには一定の制約がある。また、本稿で扱った地域連携を伴う行事運営は、一般的な授業形態では実施が困難であり、ゼミナールという少人数かつ継続的な学修環境であったからこそ可能であった実践である。

しかしながら、そのような教育環境のもとで、学生がどのような学びを積み重ね、実践を通してどのように変容していったのかを、学生および関係者双方の視点から具体的に示した点に、本研究の意義があると考えられる。とりわけ、地域協働や行事運営を含む実践において、学生の主体性、協働性、実践的判断力がどのように育まれたのかを明らかにした点は、今後の保育者養成における実践型学修の在り方を検討する上で、有用な示唆を与えるものといえる。

さらに、本研究で得られた知見を整理すると、以下の点にまとめることができる。

- ・学生アンケートからは、協働的な活動経験を通して、チーム内でのコミュニケーションの重要性が強く認識されるようになったこと、また、実践を重ねることで学生の視点が役割遂行中心から、子どもの姿を起点とした保育的判断へと移行していたことが明らかとなった。

- ・あわせて、環境構成や運営を含む複雑な場面において、協働が実践的に発揮されていたことが示された。

- ・保育者および地域イベント主催者のアンケートからは、学生の子どもへの関わり方や表現活動に対して高い評価が得られ、音楽表現を媒介とした活動が、子ども、保護者、地域住民を巻き込む温かな雰囲気づくりに寄与していたことが確認された。

- ・一方で、身体表現や参加者への働きかけについては課題も指摘されており、今後の実践に向けた改善の必要性が示唆された。

これらのことから、本実践は、学生に対して保育者として求められる協働力、子ども理解、実践的判断力を総合的に育成する教育的意義を有することが示唆された。

なお、本研究にはいくつかの限界がある。まず、研究対象がN短期大学の特定のゼミナールに所属する学生14名に限定されており、対象者数が少数であることから、得られた結果の外的妥当性や信頼性には制約がある。また、本研究で扱った地域連携を伴う行事運営は、一般的な授業形態では実施が困難であり、ゼミナールという少人数かつ継続的な学修環境であったからこそ可能であった実践である。そのため、本研究の結果を一般の保育者養成課程全体へ直接的に一般化することには慎重な解釈が求められる。今後は、対象学生数を拡大した調査や、異なる教育環境における実践との比較を通して、実践型学修の教育的効果について、より多角的に検討していくことが課題である。

## 6. 引用文献・参考文献

- いしかわこうじ (2015) どうぶついろいろかくれんぼ  
ポプラ社
- エリック・カール (著)・もりひさし (日本語訳) (1994)  
はらぺこあおむし 偕成社
- 大屋陽祐 (2025) 保育者養成課程学生の子育て支援に  
関する主体的な学びの考察：児童センターにおけ  
る実践活動から 育英大学育英短期大学教育研究所  
紀要第3号
- 新沢としひこ (作詞) / 中川ひろたか (作曲) / 高橋美夕己  
(編曲) にじ ふりんと楽譜 <https://www.print-gakufu.com/score/detail/445023/> (2026年2月25日  
閲覧)
- 杉本竜一 (作詞・作曲) / 太田桜子 (編曲) Believe ふ  
りんと楽譜 [https://www.print-gakufu.com/score/  
detail/52642/](https://www.print-gakufu.com/score/detail/52642/) (2026年2月25日閲覧)
- 田村隆宏・木村直子・谷村宏子 (2021) 保育実践力向上  
に及ぼす保育実習の効果とその促進要因の検討  
ー 子どもの関わりに関する保育実践力に注目し  
てー 応用教育心理学研究第38巻第1号
- 津村樹理・山岡伊公子 (2023) 保育者養成校における  
保育内容の学びの実効性と実習後の成果の繋がり  
の一考察 (1) 神戸教育短期大学研究紀要第4号
- 増井啓子・阪本さゆり (2024) 保育基礎ゼミ及び保育  
専門ゼミにおける保育実践力の向上を目指して  
ー 系列3園とのよりよい連携の在り方ー 奈良保育

学院研究紀要第22号

村田健治・村上優 (2025) 保育者と保育者養成校との  
協働保育実践が及ぼす学生への教育的効果 奈良  
佐保短期大学研究紀要第32号

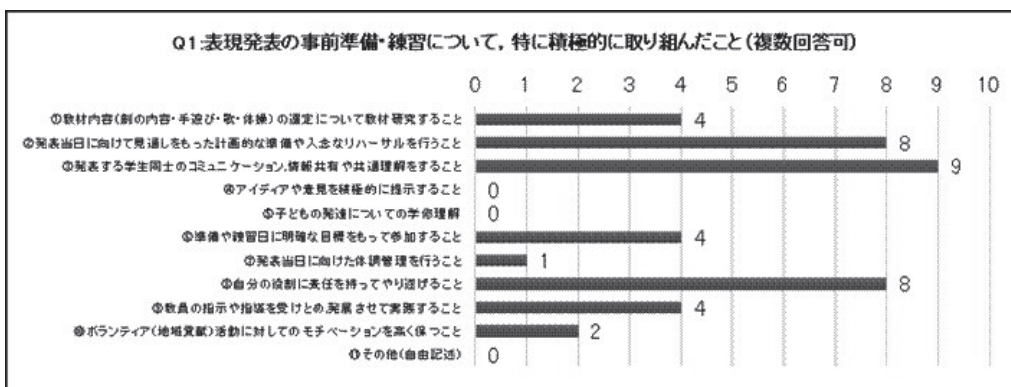
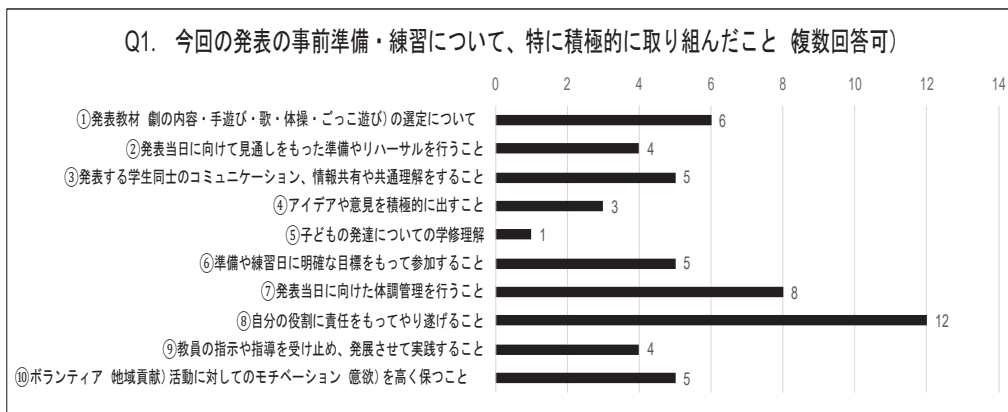
巻末 アンケート結果

本巻末には、本研究で実施した学生アンケートおよび関係者アンケートの結果を、本文中での分析内容に対応させて図表としてまとめて掲載する。

学生向けアンケート結果

Q1. 今回の発表の事前準備・練習について、特に積極的に取り組んだことは何ですか。特にあてはまるものにチェックを入れてください。(複数回答可)

(上の図は今回の回答結果で、下の図は前回の回答結果である。以下同様とする。)



Q2. Q1.についてそのように取り組んだ理由は何ですか。具体的に記述してください。(自由記述)

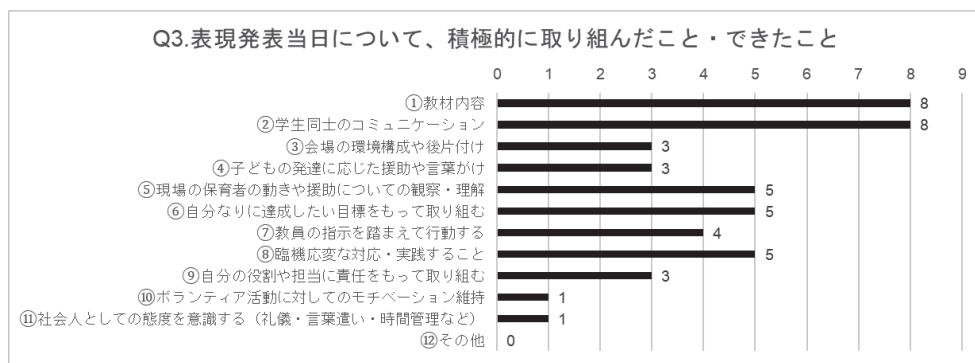
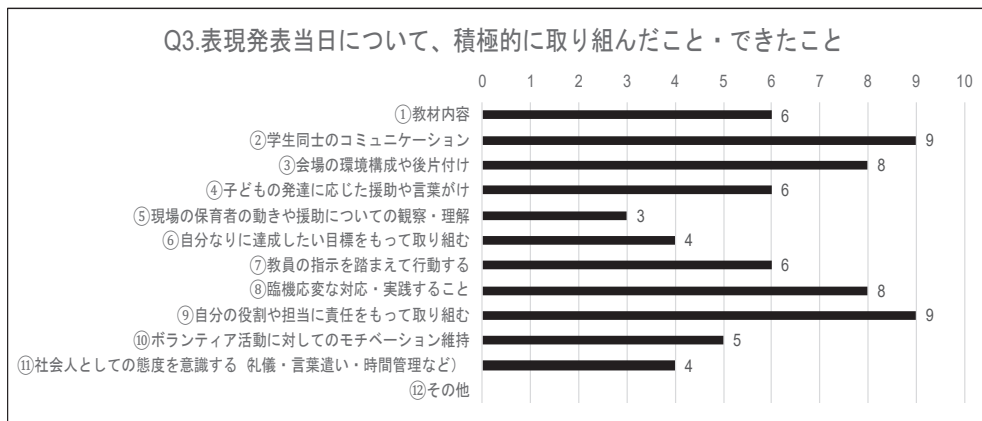
- ・②について来場予定の子ども全員に行き渡るよう、数を確認しながら期日までに完成させる。足りないより、余る方が良い。
- ・⑥今回は春休み、卒業式前ということもあって、みんなが思うように集まらなかったりしたので、しっかりと練習日や内容を必ず決めて行動するということを大切にしました。
- ・歌は周りの人の声を聞きながら自分のできることを練習した
- 合唱曲「Believe」の個人パート練習を毎日行いました。特に、合唱で大切なハーモニーを届けることを意識し、他パートを歌ったり、ピアノで他パートを弾きながら自分のパートを歌うなど、音が正しく伝えられるように努力しました。
- ・②わたあめの屋台をするにあたって、わたあめの機械をどのように作成するのか一緒に担当する子と相談をしながら、より完成度の高いものを作るように取り組んだ。
- ・③について、自分一人で行っていることではないし、また、一人では到底できない取り組みなので、チーム全体で「楽しく取り組みができるか」「前向きな気持ちで取り組みができるか」を活動を通して常に意識していました。
- 準備など全然参加できなかったため、当日の自分の役割だけは子供たちが楽しめるように声掛けとかも考えて積極的に参加した。
- ・⑧さまざまなブースがあり、分担して子どもたちと関わることになったので、できるだけ自分から声をかけて関わろうと思ったから
- ・①発表する教材が見に来てくれる子どもたちの年齢に合っていないと楽しめないし、ただ見て終わりにになってしまうので、見に来てくれる子どもたちが楽しい気持ちで過ごせるように、教材の選定はメンバー全員力を入れて取り組みました。
- ・⑩子どものたちの前へ出るにあたって、私自身がボランティアを「めんどくさい」など、マイナスな気持ちでいると、子どもたちの前での印象が悪くなり良い思い出で

きないと思ったから。

- ・⑩2年間最後のイベントかつ、呼んでいただいたもののため、しっかりと意欲を高く保ちながら当日のようになら楽しんでもらえるのかを考えたため
- ・⑧についてふざけたりしないでやること。
- ・体調が悪いと自分の本気をだせないから
- ・⑧自分自身の体調を見ながらということもあり、できる日は子どもたちのことを考えながら取り組もうと思ったから。

- ・2歳児リトミックの司会のため、何度もイメトレをしてリハーサルを行った、子どもたちに表現をする楽しさ、音楽に合わせて体を動かしたり、楽器を演奏したりする楽しさ、面白さを知ってほしいと考え、楽しい雰囲気を作ることを心がけた。
- ・自分の役割に責任をもって取り組むことについて、音楽ゼミからの意見で始まった外部公演のため、発案者としての自覚をもって、だらけることなくしっかりと役割を責任持って行わないといけないと思ったため。
- ・準備に明確な目標をもって参加することについて、小道具や衣装を練習日までに間に合うよう準備しました。背景担当になってからは役割に責任をもって、下描きの線を見ながら塗りました。一人ですることは難しいので、協力してすることで終わることができました。
- ・以前劇をするにあたって自分の役割をしっかりと出来なかったから
- ・本番になるべくリハーサルどおりに終わりたいと考えたから
- ・どうすれば子どもたちが楽しく劇を見てくれるのかを考えながら劇が始まる前に盛り上げるようなセリフを意識して取り組んだ。
- ・自分の中で「やってやるぞ」と思ったこと
- ・自分の役割のところで劇を崩してしまったら嫌なので、自分の役のところは場面ごとに練習をした。
- ・発表する学生同士のコミュニケーションや共通理解について、今回の発表の振り返りでもあったように、集団でなにかに取り組むにあたって、気持ちの理解やすれ違いが起これると思ったためです。みんなが納得・理解したうえで進めることが効率よく進み、たくさんの意見が出やすくなると思いました。
- ・数少ない集まりで、自分が担当していない役を見て、良かったところ、修正すべきところを情報共有して、より子どもの視点で楽しめる、寄り添った演出ができるようにするため、特に意識して取り組んだ。
- ・学生同士のコミュニケーションについて、自分たちがどのようなものを目指しているかを共通してもっていないと全体での動きにばらつきが出すぎてしまうと思ったから。
- ・学生同士のコミュニケーションについて、特に意識して取り組みました。なぜならチームで行っていることであるし、全員が共通の意識をもって、同じ目標をもって行うことが大事と思ったから。
- ・練習や劇で使用する教材の作成など、学生同士で積極的にコミュニケーションをとりながらより良い作品や教材を作成し、見ていただいている子どもたちや先生方の心に届く作品にしたいと思いました。
- ・衣装作成の期限を守って取り組みつつ、仲間とともに協働して取り組むことが出来た。
- ・みんなのサポートができるように周りをしっかりみて行動できた。本番前で緊張している子に声をかけ、本番に挑めるようにサポートできた。

Q3. 表現発表当日について、積極的に取り組んだこと・できたことは何ですか、特にあてはまるものについてチェックを入れてください。(複数回答可)



Q4. Q3の質問で選択した項目について、積極的に取り組んだ理由について具体的に記入してください

- ・④について、今までたくさんの実習を通して子どもにたくさん関わってきた自信と4月からいよいよ現場で教師として働くので、今まで以上に積極的に子どもとふれ合うよう心がけました。
- ・せつかくの生徒たちと関わるさいごの機会+楽しいことを望んでくれた子どもたちに向けて積極的に取り組んだ。
- ・さかなつりの場面で、子どもが楽しんで遊べるように声かけを積極的に行った。
- ・⑧ 子どもたちが自由に色々なところを回ってくるので、子どもに合わせて言葉をかけたり対応を臨機応変にしていかなければならなかったから
- ・①この公演がゼミで活動する最後の場ということもあり、自分の役割を全力で楽しんで見に来てくれるお客さんや、子どもたちに笑顔になってもらいたいという思いで積極的に取り組みました。
- ・笑顔で対応すること。
- ・②各ブースにメンバーがついて、協力して行うために何が今必要で、効率よく行動できるか考え、ブースのメンバーとコミュニケーションをとりながら作業をしました。声をかけあうことでお互いが場の空気に早く気づくことができました。
- ・②当日、何か分からないことや不安なことがあれば、メンバーに相談して環境構成や流れの確認を行いました。不安な表情や気持ちは見ている人たちにも伝わってしまうと思うので、メンバーとのコミュニケーションは積極的に行いました。
- ・仲間とコミュニケーションを高めることで自分たちもたのしめると考えた
- 会場で子どもに「一緒に来て」と言われる場面もあったが、自分の担当しているところを他の子にしっかりと伝えるように伝達した。
- ・②当日は予想していなかった出来事が起きる(当日急な欠席、早退、子どもの動きなど)可能性も大いに考えられるため、しっかりと学生同士でコミュニケーションをとり、臨機応変にすぐ対応できるようにすることに取り組んだ。
- ・絵本を読むときに子どもが聞きやすい声の大きさと話し方
- ・⑧当日は思わぬことが起こるからこそ、事故や怪我につながらないようにしたいと考えたから
- ・会場を元に戻すため、協力しながら行なった。早く帰ることで学校にも早く戻れる。現場の人の声かけに従って行動することで、周りの人の助けになる。

- ・子どもたちから元気もパワーももらって、自分自身も楽しめた。
- ・子どもたちの反応を見ながら自分のすべきことを考えながら取り組んだ。
- ・自分の役割についてしっかり考えることができた。
- ・使わせていただく場所だから
- ・練習した環境ともちろん違うので、臨機応変に対応できるようにした。
- ・自分の役割や担当について責任をもってやりとげることについて、子どもたちが思い描く物語やイメージを大切にしたいと思ったからです。今回主役をやらせていただき、主人公としての責任を大切に、子どもたちがイメージしやすいように演じました。
- ・臨機応変な対応・実践することについて、保育現場について、最も自分の中で必要なスキルなのではないかと考えており、今回の貴重な経験で、自分の中で臨機応変に動くことを目標としていたから。
- ・発表当日に亀役をすることになったけど、その役なりに笑顔で取り組み行動できた。
- ・前日の練習で言われたことを活かせるよう、擬音を足してセリフを言った。
- ・選択した項目に取り組むことで、自分自身がその時間を楽しみ、良い経験の一つになると考えたから。
- ・自分の役で緊張せずにできたこと。
- ・自分なりの目標をもって取り組むことについて、特にずっと笑顔でいようという目標をもって取り組んだ。実習でも保育者が笑顔であれば、子どもも自然と笑顔になると思っていたので、常に意識していました。
- ・リトミックの際、全体を観察して、子どもや保育者との関わりや動きに注目しながら行った。
- ・臨機応変な対応をすることについて、本番では予想外のことが絶対起きると考えていたため、すぐ臨機応変に対応できるように意識し、積極的に取り組んだ。
- ・劇では、自分が担当している役割に責任をもってやり遂げることを特に意識して行いました。一人一人、それぞれの役割をしっかりと全うすることで、みんなの力が合わさって素晴らしい劇になったと思います。

Q5. 表現発表を終えて、準備から当日の実践までを自分なりに振り返り、難しかったことやできなかったことは何ですか。具体的に記入してください。

- ・当日が春休みの期間だったので、制作などの準備に集まることやその時の進捗などを理解して見通しを立てて準備することができなかった。
- ・春休み期間ということもあり、全体で練習する時間が少なくなってしまったことが少し残念でした。合唱では他のメンバーの声を聞きながら、自分のパートを歌うということがとても難しかったです。当日のリトミックでは、司会の時に子どもたちの答えに臨機応変に対応したり、話したりすることが難しく、あまり上手にできなかったと感じました。
- ・合唱というものに初めて挑戦し、それに加えてそれぞれの予定もあるため途中で練習するときにあまり時間がとれず、自分自身も毎日練習できず、うまくハマることができなかった。
- ・中々準備に参加できなかった
- ・ダンス、歌
- ・準備では予定が合わず、前に行う環境設定に参加することができなかったことで、動線確認ができなかった。
- ・自分がどの高さまで声が出るのかを詳しく知ってなかったこと
- ・時間を決めて、準備日を設定したはずなのに、自分の気持ちの切り替えが難しく、作成が長引いてしまうことがあった。
- ・準備が予定ありでなかなか参加できなかった。
- ・授業が終わり、学校に行くことがなくなってしまったので、ゼミのメンバーとコミュニケーションを取る時間が減ってしまったこと、もちろん練習についても十分時間がとれなかったことで、準備万端とはいかなかった。
- ・練習をする際、「もっとこうの方がいい」など、自分の意見をあまり言えなかった。音楽としての完成度をもっとあげられたかもしれないと感じている。
- ・作るもの(屋台とか)などの修正や作り方など、どうしたら丈夫に作れるか、何を言えば...かなど、やり方のバリエーションに苦労しました。また、当日は子どもと関わるイベントが久しぶりだったこともあり、子どもへの声掛けが同じ言葉になったり、流れ作業っぽくなってしまったことがありました。
- ・予定ではわたあめ機で「写真も撮れますよ」という形だったが、あまり声をかけることができなかったし、大人の人と行動している子どもが少なかったため、予定の内容の

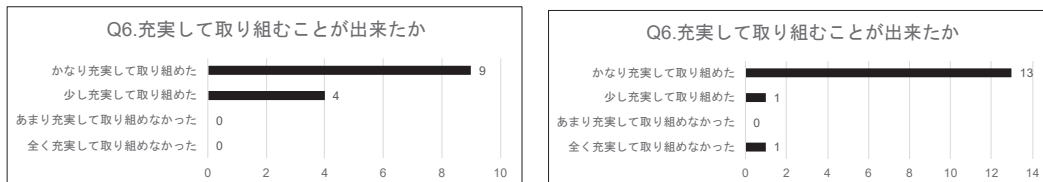
ことができなかった。

- ・子どもたちと関わるのが少し少なかったなど感じた。
- ・子どもたちの反応を見ながら進めていくのが難しかった。
- ・事前準備をなかなか手伝えることができなかった。
- ・劇の準備（衣装作り）など、みんな任せにしてしまった。
- ・練習では自分たちが思う通りに演じましたが、本番では子どもたちが思ったよりリアクションしてくれて、声が届きにくいことがあって、セリフを言うタイミングや音量を調整するのが難しかったです。
- ・ぎりぎりになるまで歌やダンスがあやふやで、当日歌詞をまちがえてしまったこと。演出の大切な一部だと頭に入れておきながらも、他のことでいっぱいになりおろそかになってしまった。
- ・もっと大きく体を動かして演技しても良かったかなと思います。
- ・セリフを覚えるのが前日のギリギリになってしまった。どうしても相手を見てしまう場面があり、子どもと目が合うことが少なかったかもしれないと感じている。
- ・準備期間には、学校が休み期間ということもあり、自分自身の気持ちの切り替えが難しかったように感じた。当日は、笑顔や関わることを心がけていたが関わり方に変化をつけられなかった。
- ・自分の中で、本番の前日は絶対に思っていたのですが、本番になって緊張してしまって演奏がうまくできなかった。
- ・木琴の練習時間を思うように取ることが出来なかった。学校にしかない楽器の練習時間確保が難しい。
- ・どうしても自信のなさが出てしまい、司会の最中に不安になってしまったりどうしようかと迷ってしまったりすることがあった。行動に悩んでしまった結果、他の学生に任せしてしまう形になってしまったことは大きな反省点である。
- ・練習の際に、子どもたちの反応などを予想して練習することが難しく、本番にならないとわからないことが多々あった。
- ・難しかったことは、劇のセリフと音楽をあわせるタイミングです。セリフと音楽のタイミングがなかなか合わず、難しいなと感じる時がありましたが、練習を重ねるうちに、セリフと音楽の息がぴったりになっていったと感じました。

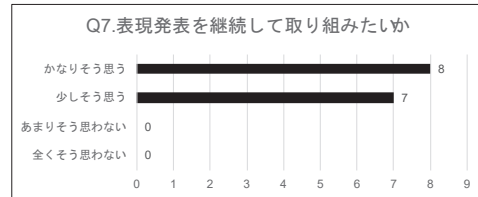
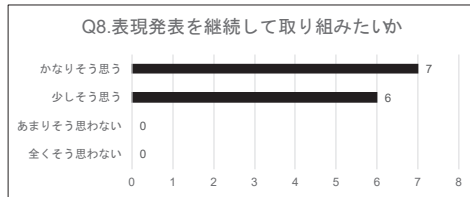
Q6. 1回生から学内行事（こどもフェスタ）や表現発表（8月いちぶちどり保育園）と活動を続けてきましたが、これまでの活動と今回の活動との学びにはどのような点で違いがありましたか、具体的に記述してください。

- ・幼児と小学生では魚釣りに挑戦する内容が違った。幼児は磁石だったが、小学生はリングに挑戦する子どもが多かった。
- ・最後にアンコールをいただいた際、何の準備もしていなかったのも、すぐとまどったけど、こどもフェスタ、いちぶちどりで積み上げてきた実績があり、臨機応変に対応できたことは、今回一番うれしかったことであつたし、何回も活動してきたからこそ事だったなあと感じました。
- ・今までは、一つのことを全員で行うことが多かったのではないかと感じていて、だからこそ協力することやコミュニケーションをとることの大切さを学べたのではないかと考えている。しかし、今回は子どもたちに合わせて動くことが多く、臨機応変に動くことが学びとして強かったと感じた。
- ・1回生の子どもたちに向けてのイベントのときと積極さもちがうし、自分自身も楽しもうという楽しみ方もちがうし、発達に合わせた対応ができた。
- ・1回生のころは、表現発表で前に出ることが多かったが、2回生での活動では保護者の方や、子どもと1対1での関わりが多かったと感じるため、より子どもや保護者の方への接し方を学ぶことができたのではないかと考える。
- ・準備不足な点が多く、不安が大きかったが、それぞれが臨機応変に対応することができていたため、成長を感じることができた。
- ・各活動はその都度の活動で経験を積みましたが、最後のイベントは総イベントとして全ての経験を活かして、自分の引き出しにさらにプラスして経験を積めた、という違いがある。
- ・子どもフェスタやいちぶちどりの際は、準備期間や練習期間に余裕がありましたが、今回の活動では春休み期間ということもあり、準備や練習の時間が限られていました。準備や練習の時間に余裕があれば、より良いものができると思いますが、一人一人が熱量をもって取り組めば、練習する期間や時間が短くても良い作品やものができるということを感じました。
- ・1回生の時と比べて、ゼミナールの団結力が高まった
- ・今回は音楽ゼミ単体での活動であり、今まで単体でのイベントをあまりしてこなかったからこそ、新たな学びがあり、人が少ない（5人）の中でどのようにして役割を分けてセリフを言ったり、楽器を移動したりしたらうまく回すことができるのかを学んだため、違いがあった。（きちんと関係ない他人の情報でも共有する。セリフの内訳を細かく刻むなど）
- ・2年間の最後のイベントということだったので、最後までやりきることや、周りの人とコミュニケーションをとることを意識して取り組んだことだと思う。
- ・子どもの笑顔を見た時のたのしさを知った
- ・特になし

Q7. 今回の表現発表は、充実して取り組むことができましたか。（左：今回 右：前回）



Q8. 今回のような発表を継続して次回以降も取り組みたいと思いますか。（左：今回 右：前回）



Q9. ゼミナールⅡでの学内行事や外部公演などを通じた経験から、卒業後に活かしたいと考えることは何ですか。自由に記入してください。

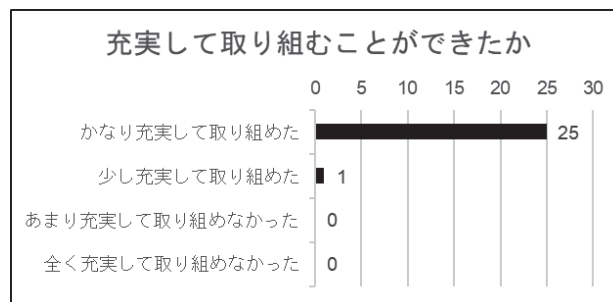
- ・現場での声かけや臨機応変な対応。その場にあった子どもの年齢や状況に合った対応ができるようになった。この経験は活かせられると考える。
  - ・今までの経験から、実際の子どもたちの姿に合わせて臨機応変に対応する力、自分自身も全力で楽しむこと、子どもたちの年齢に合わせた教材の選定など、さまざまなことを学びました。学んだことを全て卒業後、働く園で実践していきたいと思います。
  - ・子どもへの接し方を活かしたいと考える。
  - ・とにかく、一人の力はとても小さいものだけど、チーム一丸となってコミュニケーションを取りながら取り組む活動はとても達成感があり、自分自身の成長にもつながると思いました。
  - ・卒業後も、一緒に何かに取り組んでいく相手とコミュニケーションをとって関わることを大切にしていきたい。
  - ・保育内容で学んだこと全部！
- 新しい職場では他の先生方や同僚と子どものための最適な道を作れるよう常にコミュニケーションをとり、相談も適切にしながら余裕を持ってよい保育をしたい。
- ・仲間と一緒に作り上げること。職場に入ってもがんばりたい。
  - ・自分のことだけでなく、他のパートの練習など他人のことまで考えて行動することが大切だと思う。
  - ・一人で準備したり作るとは気持ちを持続することが難しかったので、自分の考えていることを周りの人にきちんと伝えて一緒にやっていくことが大事だと感じるようになった。
  - ・仲間との協力する力
  - ・行事や公演等で使用する物品を園でもすぐ用意できるもので作成する。
  - ・子どもたちが楽しいと思えるような内容を考えて、ゼミナールⅡで経験したことも参考にしながら歌と表現を組み合わせた活動を取り入れたいと考えています。
  - ・2年間で学んだ音楽知識を活かし、打楽器の鳴らし方、歌の歌い方などを子どもたちに優しく丁寧に伝えていけるようにしたい。

Q10. 保育現場や外部施設とのコラボレーション活動として取り組んでみたい内容があれば自由に記入してください。

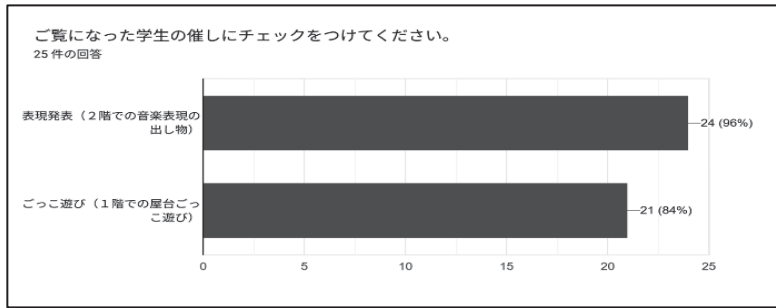
- ・今までの経験から、リトミックや絵本の読み聞かせ+音楽は子どもの反応がとても良いことがわかったので、もっとそのような取り組みをしたいと思います。
- ・保育園に行って子どもたちと一緒に合奏や合唱してみたい。
- ・今回のような上では舞台、下では出店のようなイベントはもう一度取り組んでみたい。自分が行っている活動(すまポク)として活動していきたい。
- ・自分はゼミナールで年1で集まってイベントがしたい
- ・新しい職場でがんばりまーす。
- ・取り組んでみたいと思うが具体的な内容が思いつきません。
- ・特になし

### 関係者向けアンケート結果

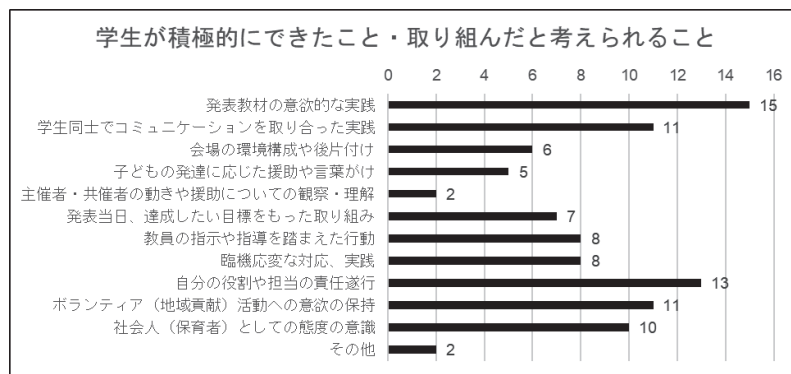
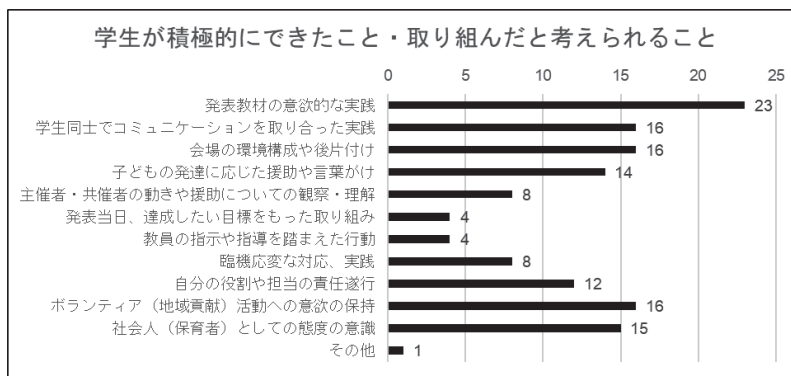
Q1. 絵本広場in南部～季節外れの夏祭り～に充実して取り組むことができましたか。



Q2: 実際にご覧になった学生の催しにチェックをつけてください。(複数回答可)



Q3. 発表当日の学生の様子をご覧になって、積極的にできたこと・取り組んだと考えられることは何ですか、特にあてはまるものについてチェックを入れてください（複数回答可）



Q4. 発表当日の学生の様子をご覧になって、よかったと思われる点をご自由にご記入ください。

子どもの接し方・関わり方に関する視点

- ・小さい子どもに寄りあっていた
- ・子ども達と積極的に関わろうとしていた点は評価出来る笑顔で子供達と接して良かったです！
- ・子ども達と積極的に声をかけていただき、一緒に制作したりととても嬉しそうでした！
- ・子供に声をかけて丁寧に教えてくれていた
- ・子どもに優しくいつも笑顔だった。
- ・同じ日線でかわわってくれたところ。
- ・お姉さん達の優しさのある声かけや、子供達に対する接し方が良かった

パフォーマンス（歌・表現・読み聞かせ等）に関する視点

- ・歌がとても上手でした！
- ・見ていてとても惹きつけられました。笑顔と歌声が素敵な方がいました
- ・お兄さんの歌声とてもステキでした！
- ・あおむしの読み聞かせ、音楽では子どもたちだけでなく大人も世界観に入れて良かった
- ・はらへこあむしは学生さんも楽しそうで、子供達も見入っていた
- ・みんなで動けるポヨヨン行進曲はとても盛り上がり、楽しく過ごせた

全体の雰囲気や学生の態度に関する視点

- ・子どもたちみんながキラキラしてました

- ・笑顔が素敵でした
- ・自分の個性を活かして発表できている
- ・同じ目線で関わってくれていた
- ・見ていて惹きつけられた
- ・いい雰囲気だった

運営・対応面に関する視点

- ・アンコールにも素早く対応して下さりしかった
- ・幅広い年齢層の方々への柔軟な対応
- ・お兄さんの中には少し人見知りなのか子供たちが怖かったと言っていた人もいた
- ・自分が昔歌っていた事を思いだし、母子ともに楽しめた

子どもの接し方・関わり方に関する視点

- ・子どもの興味に寄り添った内容で良かった
- ・前だけに立つのではなく、横にも立って子ども達を包み込む形で場を盛り上げていた
- ・楽器を渡す時に、子どもの目線に合わせて丁寧に渡していた
- ・皆さん笑顔が素敵で、緊張されている中でも子ども達への優しい声かけや表情が安心できた
- ・うたあそびや表現遊びを子どもも楽しんで行っていた
- ・動物になりきるの普段から遊んでいることで取り組みやすかったと思う
- ・わかりやすく、ピアノに合わせて楽しむことができた（子も楽しめた点として）

パフォーマンス（歌・表現・読み聞かせ等）に関する視点

- ・学生さん自身が楽しんで演じていた
- ・様々な点で工夫が見られ、表現力も豊かで素敵だった
- ・うたあそび・表現遊びが子どもにとって良かった（内容面として）

全体の雰囲気や学生の態度に関する視点

- ・学生さんの皆様も楽しそうにされていて気持ち良かった
- ・全員が笑顔で参加していた
- ・前向きで積極的な姿に感心した
- ・みんなの気持ちかひとつになっていた
- ・生徒さん自身が楽しんで行っていた
- ・まず皆さんの笑顔がよかった
- ・学生さんの連携や熱意が伝わる内容だった
- ・見ているこちらも楽しい気持ちになった（優しい声かけや表情により）

運営・対応面に関する視点

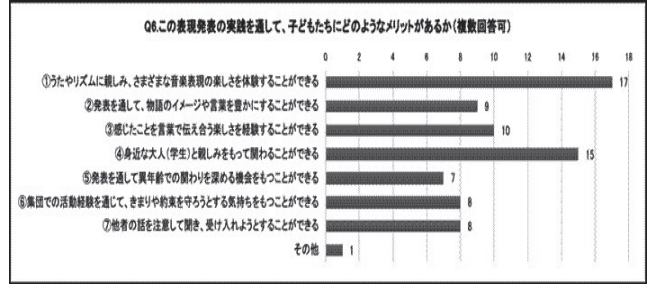
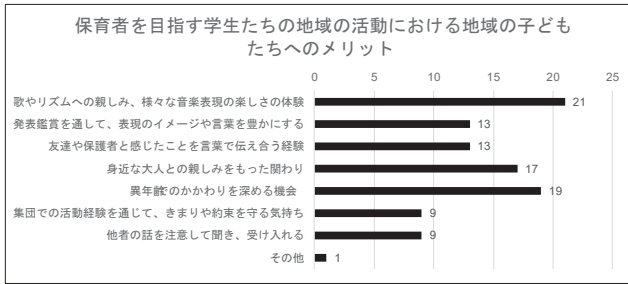
- ・先生との関係性が見られた
- ・片付けの連携、手早さが素晴らしい

Q5. 今回の学生の活動について改善すると良いと思われた点をご記入ください。

- ・これから多くの子とも関わり、様々な対応力を身に付けて、懐の深い人間性を培ってください。
- ・もう少し積極的に体を動かし、子どもの心をつかむような大きな声、笑顔で歌えたら、尚すばらしい舞台になったと思います。
- ・とくにありません。完璧でした。
- ・童謡も入れていただけると、親も一緒に歌えるのでありがたいです！
- ・学生さんの歌声がすごく綺麗だったので、マイクで聞きたかった。

- ・声の大きさが、もう少しあると良い
- ・改善ではなく、心がけるとよいこととして！子ども達には、ゆっくり話す。言葉だけでなく、手足全部身体全身で表現する。表情も豊かに！
- ・本当に特にありません。みなさんの笑顔、やる気とても素晴らしい！
- ・子どもへの言葉かけの声の大きさやトーンなど工夫があれば良かったです。楽器紹介や、さまざまな楽器の音色を聞かせてもらったり、海奏を聞かせてもらったりしてほしかったです。
- ・声が小さい学生さんもいたので聞きづらい所もあった。
- ・始まりの手遊び？がバンの曲明るい曲、優しい曲に聞こえず、曲調が暗い感じだったので何か始まったのだろうとびっくりしているように感じました。初めはもっと乳児向けの曲や誰でも知っている歌にしてもらえると、和やかにスタートできたかな？と思います。
- ・子ども達の声もあるので、もう少し大きな声やジェスチャーで伝えていただけたらもっと良かったと思います。
- ・特にありません。
- ・楽器の音で声がかえらない場面があったので、声に強弱をつけたり身振りや手振りをつけたりして伝え方を工夫すると、より次の活動や楽しかった時間を振り返る余裕ができたと思います。
- ・物語の中で子ども達の反応があった際、セリフと被ってしまう場面があった。
- ・普段見たこと聞いたことのない楽器などの音やリズムを聞いたりする機会があっても良かったかなと思いました。
- ・特にないです。

Q6. 今回の発表のように、保育者をめざす学生たちが地域の活動に参加することで、地域の子供たちにどのようなメリットがあると考えられますか。（複数回答可）（左：今回 右：前回）



Q7. 今回の表現発表・ごっこ遊びを通して、主催者・共催者にどのようなメリットがあったと考えられますか。ご自由にご記入ください。

- ・公民館が地域の広場となるよう貢献した。地域の様々な人達のコミュニケーションを深めるきっかけとなった。
- ・協力しあって一つの舞台を成功させる、達成感のあるイベントになったのではないのでしょうか。
- ・地域の方や、初対面の方など、交流が深められたこと。実体験できること。
- ・若いパワーをもらいました！
- ・色んな発表があり勉強になりました
- ・学生の演奏と、伸びやかな歌で、本人形などで、身近に子供達が語を感じ、入り込み、注目していたので、情味教育に寄与していると思いました
- ・ひとつの目標に向かって取り組み楽しむこと

伊

- ・子どもとの接し方が学べると思います！
- ・将来の目標に対して良い経験になる。
- ・文字で学ぶ学習とは違い、実体験を積み重ねることで本蔵に就くまでいろいろなことにチャレンジできる。

- ・音楽とふれあう色々な方法を知れ良かったです。
- ・楽器に触れる機会や、楽器の鳴らし方を知ることができた
- ・乳児は様々な楽器に触れ合う時間が少なかったため、楽器に触れることで楽器に興味をもつことができているのでまた今後楽器を使った活動を取り入れようと思えるようになった。
- ・生活発表会に向けて期待をもつ良いきっかけとなった。
- ・2月に生活発表会があることで、前提での話が子ども達に伝わりやすいこと。身近な楽器の他にバイオリンなどあまり見ることのない楽器にも触れられること。
- ・表現する楽しさを子ども達に感じてもらえた。子ども達(幼児クラス)は2月の生活発表会への、合奏や劇に興味をもち、期待を持って取り組める。普段の遊びにも楽器が身近になった。
- ・音を楽しむことや音楽制を観ることで、保育者が他んな視点に気づくことができる。また、保育の振り返りにも繋がる感じた。
- ・子どもだけでなく、職日である私達も参考になり、もっと頑張らねばと大変刺激を受けました。
- ・楽しい一時を過ごせました。
- ・子ども自身が表現をする楽しさを感じている姿を見ることができた。
- ・今年は暑く、戸外や水遊びにも制限があり、室内遊びのバリエーションが増え、みんなが楽しめた内容で、運動遊びや劇表現遊びにつながるの、よかったです。
- ・子ども達の無味・関心をもっていることを改めて感じる事ができたとし、鈴なら簡単に鳴らせると学ぶことができた。
- ・子どもたちはお兄ちゃん、お姉ちゃんが大好きなので普段と違う人と関われるのは嬉しい事だと思います。
- ・普段関わることが少ない、学生さん達と関わることが出来て、刺激になったこと。